文化

日本画家・平松礼二さんが
今夏、仏ジヴェルニーで個展

第二次ジャポニスムを期待

印象派の巨匠、モネが愛したフランス・ジヴェルニー。そこにある公立美術館に招かれて今夏、日本画家の平松礼二さん(七)が、展覧会を開くことになった。日本画を世界に発信する絶好の機会に、平松さんは東京都内で八日あった記者会見で「日本人としての誇りを持ってやり遂げたい」と抱負を語った。

フランスでの展覧会に向けて作品への思いを語る平松礼二さん＝東京都内で

会場は、パリ・オルセー美術館の文化、学術的パートナーであるジヴェルニー印象派美術館。モネが半生を過ごした自宅と庭にほど近い場所にある。

展覧会は、ジヴェルニーを含むノルマンディー地方を舞台に開かれる「第二回ノルマンディー印象派フェスティバル」の一環。「平松礼二、睡蓮の池 モネへのオマージュ」と題して、七月十三日から十月三十一日まで、屏風作品など二十六点を展示する。

モネといえば、浮世絵の流入などを機に十九世紀後半、フランスで巻き起こったジャポニスム（日本趣味）に影響を受けた一人。装飾性あふれる作風で知られる平松さんは一九九〇年代後半から、そのモネら印象派の画家が描いた風景を、日本画材で表す「印象派・ジャポニスム」シリーズを手掛けてきた。

出展される「池に金色の雲映る」＝2011年

きっかけは九四年。初めて訪れたパリのオランジュリー美術館で、モネの「睡蓮」のシリーズを見た時、作品にくっきり現れている日本趣味への興味がわき上がった。「モネをはじめ印象派の画家たちが、なぜ日本の風俗、文化に魅了されたのかひもといてみたくなった」と振り返る。

フランスの公の施設での、日本画家による展覧会は、これまで例がないという。平松さんは「現代美術や洋画などに比べると、日本画は日本という島国に限定された表現だと少し引け目を感じていたが、我流で突き進めばいいんだと思い始めた」と力強く話した。

平松さんの作品について、会見に同席した小山ブリジット武蔵大教授（比較文学、比較芸術）は「箔やプラチナといった日本画が持つ物質性の美しさだけでなく、世界に通じる普遍的な美がある」と説明した。小山教授によると、欧州では近年、ジャポニスムに関する研究が盛ん。「展覧会が、第二次ジャポニスム到来につながるのではないか」と期待を口にした。

（宮川まどか）